

2021年3月14日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「これに聞け」マタイ 17章 1～8節

主任牧師 加藤 誠

「ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け』という声が雲の中から聞こえた。」(マタイ福音書 17章 5節)。

「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」。

主イエスに向かって天からの声が響いた場面は福音書の中に二回記されています。主イエスがヨハネからバプテスマを受けられた時と今日の場面の二回です。

ヨハネが宣べ伝えたのは「悔い改め(立ち帰り)のバプテスマ」でした。「神さま、あなたの御心に背いて歩んできたわたしを赦してください。あなたに立ち帰ります！」という意味のバプテスマです。そのような「悔い改めのバプテスマ」を、なぜ神の子である主イエスが受ける必要があったのか。ヨハネは戸惑いましたが、主イエスは「神さまの御心に従うことは正しいことだ」と言ってバプテスマを受けられました。

また今日の場面の直前に主イエスは御自分が殉教の死を遂げることになるかと語られたために、ペトロが驚いて反対したのですが、主イエスはそのペトロに向かって「サタンよ、退け。あなたは神のことを思わず、人のことを思っている」と厳しく叱責されました。「十字架に向かうわたしの邪魔をするな。わたしの後ろにまわって、わたしのあとについてきなさい！」と。その六日後、主イエスはペトロ、ヨハネ、ヤコブの三人の弟子だけを連れて高い山に登られた時に、天から「これはわたしの愛する子」という神さまの声が響いたのです。

ヨハネの悔い改めのバプテスマを受けて、人びとの罪と一つになられた主イエス。

十字架に向かい、十字架の上で、人びとの罪を引き受けていかれた主イエス。

ご自分の罪ではなく、人びとの罪、私たちの罪を引き受けて、罵声を浴びせられ、唾を吐きかけられ、鞭打たれて行かれた主イエスこそ、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者。これに聞け」と、神さまは天から語られたのでした。

もしこの天からの声が、たとえば十字架の場面で、主イエスを十字架につけて殺そうとしている人々に向かって響いたなら、どんなに良かったらうかと思えます。「お前たちは大変な間違いを犯している。お前たちが殺そうとしているイエスこそ、わたしの愛する子、わたしの心に適う者なのだ！」という、神さまの声が人びとの間に響いたなら、どんなに良かったことでしょうか。きっと多くの人びとが自らの過ちに気づかされ、神さまの前にひれ伏し、神さまに立ち帰ったのではないのでしょうか。ところがそうはなりません。神さまの声は人びとに響かないのです。

ここにイエス・キリストの信仰の難しさがあります。

主イエスは正しい方。私たちがその主イエスに従い、主イエスのことを宣べ伝えたなら、それを聞いた人びとが「ほんとうにそうですね！」と相槌を打って、「自

分も主イエスに従いたいです」と言ってくれたなら、どんなに良いでしょうか。ところが現実はそのようではありません。「真面目だねえ。ほんとうにいるかどうか分からない神なんて信じて、どんなご利益があるの?」、「キリストが言うように愛の神がいるのなら、どうしてこんな不条理なことが毎日起こるの?」。

信仰と結果が見える形で結びつかない。現実の世界に神の愛が見える形では実現していない。これが私たちの生きている世界です。ちょうど教会の聖書日課で、先週はイザヤ書の9章や11章の「インマヌエル預言」（イエス・キリストの誕生が預言されている箇所）を読みました。イザヤは確かに神から聞いた言葉を語りましたが、それが実現したのはなんと七百年後だったのです! 「神の言葉がきょう明日に実現して喜んだりするような世界に招かれているのではない。もし私たちが信仰の結果をすぐに求めるなら、それはご利益信仰になってしまう」という意味のことを榎本保郎先生は語っておられます。

「神さまの愛の真実、神さまの正しさが見える形で実現するのを、私は自分の目で確認することができないかもしれない。神さまの御言葉の成就是、私が死んでずっと時間が経った後かもしれない。けれども、すでに神さまはイエスさまを送ってください、イエスさまが私たちの罪を受けて十字架に死に、復活の命を見せてくださった。それゆえに、わたしは神の愛の真実と正しさを信じて生きていきます!」。

「すでに!」実現した神さまの恵み（イエス・キリスト）を受け取って、「いつか必ず!」世界中の人と人の間に実現する神さまの恵みを望み見てイエス・キリストに従っていく。これが聖書の証しているイエス・キリストの信仰です。

イザヤのインマヌエル預言は「平和の主」として来られる方、メシアを預言しています。「平和の主」によってもたらされるのは「そこなうことなく、やぶることがない平和の到来」であると榎本保郎先生は語られています。

「私たちが生きている世界は、そこなうことによって保たれている。私たちの生きていることが誰かに迷惑をかけ、誰かを悲しませている現実がある。私は悪いことをしていないとしても、生きていることをたどれば、アメリカがベトナムの人を苦しめることに協力していることになる。人の平和は、だれかをそこなう平和でしかない。完全な平和ではない。そこなうとか、やぶることのない完全な平和は、神によってしか実現しない。そしてその究極の平和は『主を知る知識』が全世界を覆う時に実現するのだとイザヤは語る。私自身が、その神の平和の実現を信じ、伝えていくことが、私たちの具体的な平和の歩みであることを忘れてはならない」（榎本保郎『旧約聖書一日一章』イザヤ11章より一部抜粋）。

この神の平和を主イエスは十字架への道を歩み通すことで実現されました。私たちが肉の目では、いま、その神の平和が見える形で確認することができないとしても、「いつか必ず!」、すべての人がはっきり見える形で実現する神の平和の前触れとして確かに十字架のキリストにおいて実現したのです。「これに聞け」。十字架の主を指し示す神さまの言葉に、今朝しっかりと聴いていきたいのです。